

自転車通勤は概ね順調で、毎日片道五キロ高低差三十メートルの通勤路を電動アシスト自転車であらに走っている。

何によらず、スタイルを変えてみると、意識に上つていなかったことが目に止まり、見れども見えずだったそれまでに驚くのだが、朝夕にすれ違う自転車通勤諸氏のそれぞれを観察するのも面白い。

ちょうどルートの中程に、交差点と併走させた地下道がある。駅近くの主要幹線道路なので利用者も多い。入り口には、ジグザグにステンレスの円形ブロックが埋め込まれていて、自転車は降りて通行するように書かれている。今は街路樹も帯になったので、吹き込む風に押されて落ち葉が右左に流れてブロックの向こうへと舞い降りていくのを毎日目にする。

自転車を降りなくても、そのまま下っていくスペースは十分ある。いちいちブレーキを加減しながら自転車を引くのが面倒臭い向きは、どれほど従うだろうかと疑ってかかっていた。自転車通学の中学生なら学校からやかましく言われているだろうから大半は守るとしても、高校生なんぞそのまま駆け下りたかろうと思うのである。

ところが、意外なことにそのまま下るような者はほとんどいない。風体から判断して、降りる降りないの当たりをつけるのだが、ほとんど外れるのである。歩道を三列に広がって喋ると笑うを猛スピードで繰り返す高校生たち。シャツはズボンから出ているし、周囲に気を配っているように全く見えない。こいつらは降りるまいて、そう思っている、入り口できちんと降りるのである。三列は崩さないで、ブロックを枯れ葉同様にジグザグに歩いている。窮屈とも思われない。

そうかと思うとスーツで身を固めた若い女性が降りずに下つてきたりする。安全上も降りるのを勧めたいような年配の女性もふらつき加減でそのまま乗っている。さすがに気が咎めるのか、降りない面々は、押して歩いているばかりと目を合わせうとはしない。心のうちでつぶやく。

「いや、そんな大したことと思っていませんから。」  
地下道の中央、最も低いところには、落ち葉が溜まって絨毯を敷いたようになっていた。それだけの風に乗って辿り着いたものたち。いづれ、またそれぞれの風に送り出されていくのだろう。



# 夕焼け通信

2019.11.25 1239号 編集 宮森健次

〒699-0823 島根県松江市西川津町4276-402  
miyaken@me.com gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/

## 手作りのくらし2 31 木幡智恵美

### 干し柿 (2)

今年柿の生り年なのか、松江の我が家の庭でも柿が久々によく生った。私がこの家に来た頃は、毎年大きな実の富有柿が数個ずつ生っていたものだ。四半世紀前、三十ちよいで逝ってしまった義弟が卒業記念に植えたものだという。

それが、庭木の剪定を頼んだ際、ぼつざりと枝を落とされてからというもの、全く実が生らなくなってしまった。出雲の家の庭にある西条柿もだったが、柿は枝を大胆に落とすと、しばらくは生らないようだ。この富有柿も十年余り実が生らず、去年ようやく三個ほど実が付いたのだった。

その柿の木に、今年は数十の実が付いた。猛暑に焼けるのでは、台風で落ちるのではと、出雲の柿同様に眺めていたが、実は枝にへばりついている。十数年ぶりに、おいしい富有柿にありつける。ところが、夏の終わり、イラガに葉を食い尽くされてしまったのだ。枝に実だけが付いた異様な姿になっている。服を纏わない棒っ切れの先に顔だけ付いた案山子のようなものだ。このままでは実も落ちてしまうかもしれない。

ほぼ一日おきにデイサービスに行く義母を送る朝、いつものように家の前で迎えるのを待っていると、「おい、母さん。ほら、見てみ」と、夫。家の横からだいたい色を覗かせている柿の枝に、薄緑色のものがちらほらと見える。新葉が付き出したのだ。柿の実が多数生ったこと以上の驚きだ。小さなつやつやした黄緑の葉から、沸き立つような力が感じられた。

実は、最終的には三十数個採れ、枝ごと玄関の飾りになったり、近所に配ったり、百歳前の義母や孫たちの食後のデザートになったりと、大活躍。私たちに活力を与えてくれた葉は、見事に色づき、役目を果たして庭の絨毯となった。

**30代フリーター** 中高年男性向けの週刊誌が「死ぬまでセックス」などとおおる特集をしているのを新聞広告でよく見かける。ジイさんも人ごとじゃないだろ？

**年金生活者** 男性機能の衰えとその果てにある全面停止は、現在進行中の老化と、やがて来る死を象徴する事象だからな。

若いころ、何かに自信を持ったとき、性欲が亢進するのを覚えた。若い今は性欲の衰えが自信を減退させている気がする。ここでいう自信とは人並みのことをできる自信を指す。人並みのことは世間の掟にしたがつた振る舞いのことであり、フロイト流に言えば現実原則にかなった行動だ。

一方、性欲のほうは成人の性交欲という意味だ。それは常に現実原則の制約を受ける。母の乳房を吸うのに快感を覚える小児の性欲が現実原則の制約をあまり受けないのと対照的といつていい。性交欲は現実原則の制約を前提にした欲望であり、もしその制約がな

て得られる快感、すなわち授乳で得られる快感もそれに見合つて、深いものにはならない。

この乳児の快感は成人すると性交による快感に取つて代わられる。性交の機会は授乳と違つて限定されるから、それに対する欲求は乳児の空腹よりも緊張度を高める。その解消にともなう快感、すなわち性交による快感はそのぶん授乳時の快感よりも深くなる。

**30代** 年を取るとそれが難しくなつて、あがくわけだ。

**年金** 緊張と解消の振幅の大きさは、老化による生殖機能の衰えとともに、再び乳幼児期のように小さくなる。振幅が大きいときは、小さな打撃の痛みは大きな緊張によつて麻痺させられたり、大きな快感によつて和らげられたりして、あまり気にならない。ところが、振幅が小さくなると、それを敏感に感じ取るようになる。

**30代** 快感は子供と大人でどう違うんだ。

**年金** 性交時の快感は、胎児が恒常的

くなれば減退するだろう。

だから、現実原則にかなつた振る舞いのできたとき、言い換えれば人並みのことができる自信を持ったとき、性欲も亢進する。思春期から青年期にかけては現実原則を身に着ける時期であり、それをひとつ身に着けるたびに性欲が亢進し得ると考えることができる。

老いることでいちばん思い知らされることのひとつは性交欲の衰えだ。それを無意識のうちに自信と連動するものとしてとらえる長年の習慣が、自信の減退を強いる。さらに、現実原則にかなつた振る舞いを次第にできなくなつていく老化の過程が、それに追い打ちをかける。

**30代** 週刊誌が売れるはずだ。

**年金** いま72歳になる私は、もともとあつた感情の過敏さが50代なかばくらいから次第にエスカレートしてきた。自分の言動をだれかに否定されたりすると、心に痛みを覚えることが頻繁になつた。私なりにいくつか考えついた

に感じている快感の濃縮されたものと考えることができ。そのぶん鋭く、胎児のなだらかな快感と対照をなす。

濃縮されるのは、恒常性が失われるからだ。母胎の宇宙と一体化し、自らが宇宙そのものでもある胎児は外部を持たない。フロイトのいう現実原則が入り込む余地がなく、快感原則が常に貫徹される。つまり胎児の快感は恒常的だ。

生まれ落ちて乳児になると、とたんに外部が出現し、快感の恒常性が寸断される。途切れ途切れにしか快感を覚

原因のうち、ひとつが性とかかわつている。

**30代** 無理してこじつけなくていいよ。

**年金** フロイトの想定した快感原則は、緊張が生じるとそれを解消しようとする無意識の心の傾向を指す。それは乳幼児期、青年期、老年期で異なる働き方をするというのが私の理解だ。つまり緊張と解消の振幅が生涯の時期によつて異なっている。

緊張の度合いが高いと、それが解消されて元に戻る際の変化の幅は大きいし、緊張度が低いと復元の幅は小さい。その振幅は乳幼児期は小さく、青年期に大きくなり、老年期には再び小さくなる。

乳児は快感原則にしたがつて、空腹にともなう緊張を母乳の摂取で解消する。それは同時に母の乳房を吸うことで快感を得ることもある。授乳は通常なら一日に何回も行われるから、空腹は浅く、それによる緊張の度合いも低い。したがつて、緊張の解消によつ

えることができなくなり、代わりにそのぶん快感が濃縮され、鋭くなる。乳児が母の乳房を吸うときに覚える快感がそれに該当する。

成人して生殖機能が備わると、性交時の快感が加わる。それは乳房を吸う快感をはるかに上回る鋭さがある。性交は母乳を飲むようにしよつちゅうはできないので、それだけ快感が濃縮される。

加齢とともに生殖機能が衰えると、そうした濃縮された鋭い快感を得ることが難しくなる。いやおうなく子供に戻つていく。鋭かつた快感はなだらかなり、快感を覚える時間は長くなる。最後は胎児のそのように快感とは言えないくらいに平坦さを増し、恒常的になる。

老いにはまだ遠いのにセックスストレスになつたカップルの中には案外それを感じていない。それは乳児が母の乳房を吸うときの快感、あるいは胎児が恒常的に得ている快感に近いかもしれない。

717  
中村 礼治  
ニュース日記

## 快感原則の成長と老化